

日付:2014年8月10日／聖書:創世記25:7~11

主題:「平和の基」

アブラハムはこの世の生涯を終えて、2 人の息子イサクとイシュマエルに葬られた。この墓には先に妻サラが埋葬されているが、この墓、土地はやつとカナン地方の一部に、自分の土地を得たものであった。思い出してみたい。アブラハムがカナン地方に入った時、主は「あなたの子孫にこの土地を与える」(12:7)と言われたのだが、あれからどれだけの年月が経ったことか。アブラハムは決して、権力、暴力、神の不思議な力をもって、土地を奪ったのではなかった。自らを寄留者としての立場を明確にし、常に謙虚に先住民と接触し、そして信頼されて行く中で必要な分だけ、土地を買い取っている。ここに一つの平和の基を見る。(※創世記 23 章参照)

この創世記 12 章の「あなたの子孫にこの土地を与える」という記述が、現在のイスラエル国再建の根拠の一つになっているが、今もパレスチナ人が住むガザ地区と争いが絶えない。争いと言っても一方的な武力でガザ地区に空爆、侵攻を行い、数千人の死亡者が出て、多くの子どもが犠牲になっている。この暴力は神の御心ではないことは明白である。今一度、平和の基がどこにあるのか、このアブラハムの歩みから学ばなければならないであろう。

「息子イサクとイシュマエルは、マクペラの洞穴に彼を葬った」とあるが、これは中々在り得ないことが記されている。二人ともアブラハムの子どもだが、しかし母親は違う。イサクは本妻の子で、イシュマエルは召使であった女性との間に出来た子。本妻のサラに息子が生まれると、そのイシュマエルと母親は、この群れから追い出されたのであった。荒野への追放は死を意味した。ゆえにイサクに対するイシュマエルの思いは複雑であったであろうし、憎しみさえ抱いていたのではないだろうか。これまでに何があったかは記されていないが、父アブラハムの死がこの二人を、仲たがいであったであろう者同士が一つにされている。ここに平和の基があるように思う。神は、双方の違い、わだかまり、憎しみ、恨みにおいて、仲たがいを願っては居られないのである。

イサクの子孫はイスラエル人としてユダヤ教の基となるが、イシュマエルの子孫はアラブ人としてイスラム教の基となったという伝承がある。今やその歴史は、中東問題に発展し、絶え間なく戦争や争いが起きている。この問題は非常に根深いものがあるが、しかし聖書は、敵意と言う隔ての壁を取り壊し、平和をもたらそうとされている事に、私たちは気づかされて行きたい。
(神谷)